

高等学校の「総合的な学習」としての古典旅行

江口 修司・金尾 茂樹・金子 直樹・金本 宣保
世良 馨子・竹盛 浩二・信木 伸一・藤原 敏夫

当校の国語科では古典旅行を実施してきている。1991年度から、4年生（高校一年生）で、明日香に「万葉集」の旅として行ってきているが、自らの読みをもとにして、旅行のなかで感じ考えていく学習活動である。この学習を総合的な学習という面から考察し、その意義と課題を考察する。

当校の国語科は、古典旅行を1979年度に始め、1980年度から1983年までの4年間は4年生（高等学校1年生）で、計150名の参加で行ってきた。1984年度は2年生（中学校2年生）で、1985年度は2年生と4年生とで行った。1994年度から4年生で、3月に明日香に「万葉集」の旅として行ってきている。1994年度は阪神大震災のため中止されたが、1999年度も2000年の3月に計画している。（注1）

注1：『広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要』（以下「中等教育研究紀要」）

第23巻(1983.3)・第24巻(1984.3)
第25巻(1985.3)・第26巻(1986.3)
第32巻(1992.3)・第35巻(1995.3)
第37巻(1997.3)・第38巻(1998.3)
第39巻(1999.3)

1 古典旅行のねらい

1991年度の古典旅行について「中等教育研究紀要第32巻」で次のように述べている。

「教室で学んだ古典を、その地に出かけ、自分の足で歩いてより深く味わおうというねらいで、1979年度以来、古典旅行を実施してきた。今回は、『万葉集』をとりあげ、目的地として奈良県の明日香村を選んだ。歌のよまれた地に立つことは、その作品の生命エネルギーにふれること、万葉人の心に近づくことを可能にする。また、日頃、古典を遠い存在としてとらえている生徒に、作品を身近なものとして感じさせることができ、生徒の学習意欲を高めることにもつながると考える。」

1997年度の古典旅行について、「中等教育紀要第38巻」で次のように述べている。

「自らの『読み』をもとにして、『感じる』、『考える』ことのできる学習活動の一つとして、当校では例年

『古典旅行』を実施している。1998年3月（春休み）、高校一年生を対象にした『古典旅行』では、以下のことを、ねらいとした。

(1) 実際に現地を訪れる前に、万葉集の歌を十分に読み、イメージをふくらませる。

このような体験学習においては、事前の準備の有無によって成果が大きく異なる。教室での作品の読みを深めておくことが、現地に赴いてからの作品と風土との関わりへの認識を、より豊かなものにする。

(2) 前項の、明日香の地への『先入観』を、明日香の地で検証する。

山川の姿や距離感などの現地の空気の中に、自分のイメージを見つけ出す。作品の世界をどのように実感できたのか、あるいは実感できないのはなぜかを考えることによって、作品の読みを深いものにする。」

2 総合的な学習と古典旅行

平成11年3月に告示された「高等学校 学習指導要領」の総則第4款 総合的な学習の時間に「総合的な学習の時間」のねらいを次のように述べている。

「2 総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとする。

(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や研究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の在り方や生き方を考えることができるようにすること。」

このねらいは、そのまま当校の古典旅行のねらいと重なるものである。古典旅行は国語の教科教育の発展とし

て計画したものであったが、国語の教科の学力を育てることに止まらず、学習とはどういうものを学び、主体的に学習していく態度を身に付けさせようというものであった。

「中等教育研究紀要第38巻」では、学習を深めるための具体的な方法にもふれている。「総合的な学習」において、特に高等学校においては、いかにして他の学習では学ぶことのできないものを学ばせるかという視点が必要であろう。新しい知の体験を目標とすることが、「総合的な学習」の時間における学習者の意欲を高める。

3 国語の学習の総合化と古典旅行

古典旅行は古典の学習だけではなく、国語の学習を総合的なものとしてとらえることに発展していく。

平成11年3月告示「高等学校 学習指導要領」では「国語表現」が改めて重視されている。古典旅行の事前学習においての資料作成、その資料作成者から参加者全体への説明、また事後での体験学習の作文など表現活動が学習の中心となっている。

また、この学習は、高等学校の国語の学習全体にも活かされている。「中等教育研究紀要第38巻」で1996年度の古典旅行についてのまとめで次のように述べている。

「古典旅行での学習成果は、生徒達の日々の学習活動の中にもいかされている。一例として、前年度古典旅行に参加した生徒（現高校3年生）が現代文で小林秀雄の文章を学習した際に書いた感想を挙げる。

「小学校2年の時に奈良へ行ったが、思い出に残っているのは鹿くらいだ。最古の木造建築である法隆寺さえも、ほとんど記憶に残らない。ところが、去年の古典旅行となると、甘樫丘の些細な場所までも記憶に残っている。これは、昔のことを忘れてしまったからではないのだろう。私が幼かった、正確には、知識が幼かったからだ。その背景を知らないで歴史的記念物を通して、実はそれに関わった『人』や『気持ち』を思い出しているから。だから、聖徳太子も知らないで法隆寺という建物を感じるより、和歌を解釈して甘樫丘という場所を感じる方が、よほど簡単なのだ。あの、自分が吸い込まれそうな感覚を、小林秀雄は『歴史の魂』と表したのだろう。それは彼の言うように直接見なければ、本能で感じなければ決して得ることはできない。しかし同時に、知識すなわち理性の営みがなければやはり得ることはできないのだ。」

1年以上経た後で、それも現代文の授業で、学習の発展としての作文で、古典旅行のことを述べている。生きた学力となっている。

4 生涯学習と古典旅行

平成11年3月告示「高等学校 学習指導要領」では、「生徒に生きる力をはぐくむことをめざし」とあり、学校が生涯学習の基礎となることが求められている。「総合的な学習」は、生涯学習の基礎となる学習でもある。例えばある卒業生は、「広島大学附属福山中・高等学校 創立50周年記念誌」で、学校時代の思い出として、次のように語っている。

「行事との関わり 大本耕三

附属では、テーブルマナーの講習会やスキー合宿、古典旅行などの自由参加の行事がたくさんあり、すべてよい経験となりました。

特に古典旅行は、少人数で、また奈良での移動は自転車という、みんなで行く修学旅行とはまた違った旅行で、のんびりとしていたのを覚えています。心地よい春の趣も感じられました。

現在、私は北海道に住んでおり、春の訪れはなかなか遅く、この奈良での春を思い出し、まだ高校生の自分の姿を思い浮かべ、懐かしむこともよくあります。また、和歌の詠まれた場所に行き、当時の風景を想像したのも楽しかったです。（以下略）」

様々な思い出が語られるなかで、古典旅行も「心地よい春の趣も感じられました。」「楽しかったです。」と語られている。学習体験が、まさに「生きる力」となっている。

また、それを読んで、次のように頼りをしてきた卒業生もある。「『附属50周年史』を拝見しました。私達が卒業してから始まった『万葉の旅』。卒業生も参加できるなら、子育てが一段落したら行きたいなあと思いついて読みました。」生涯の「楽しい国語教室」である。

古典旅行は国語教育の目標「言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。」（注2）につながっている。

注2；平成11年3月告示「高等学校 学習指導要領」

5 総合的な学習としての古典旅行の課題

総合的な学習としての古典旅行の課題として以下のようなことが考えられる。

(1) 教育課程全体のなかでの位置付けを明らかにする必要がある。中高一貫教育を実践している当校の場合、中学校高等学校の教育課程全体、また、総合的な学習の時間の構成、それを明らかにしたなかで国語科の教育を改めて考える必要がある。そこで古典旅行を位置づけて、ねらいと方法を検討していきたい。

今までの古典旅行で達成されてきたもの、他の学

習では学ぶことのできない豊かなものを学ぶという
ことは継続していかねばならない。

(2) 他の教科とも関連させた学習としていきたい。古典旅行は、その内容から日本史との関連が深い。かつて、事前学習において日本史の先生に授業をしてもらったり、旅行に引率してもらい現地で説明してもらったりしたこともあった。現在は国語科だけで事前学習の指導をし旅行を実施しているが、総合的な学習としてより充実したものにするために他の教科と協力した学習としていきたい。

以下に、1998年度の学習として1999年3月に実施された古典旅行の具体的な内容を報告する。

6 1998年度の古典旅行

1998年度は、1999年3月23日・24日の二日間、4年生（高校一年生）の希望者22名とともに、奈良県明日香村を中心に、自転車で、万葉集にある歌にゆかりのある地を訪れた。（引率者；金本宣保・呉屋博・世良馨子）甘樫丘では桜の花が一輪ほころびていて、私たちを迎えてくれた。

7 古典旅行の実際

1, 事前学習について

附属中学校では、百人一首を覚えることを国語科の課題としている。毎年一月には、中学生を中心として、校内百人一首大会を催し、課題に取り組んだ成果を発揮する場としている。また、生徒たちの中には、中学二年生の時選択授業で国語をとり、「大伴旅人」の作品を読み、学習しているものもいる。万葉集については、中学三年生の教科書に取り上げられているものを授業で扱った。しかし、高校に入ってから、『伊勢物語』や『土佐日記』などを読み、和歌についての学習も一通りはやっているが、取り立てて和歌を読み味

わう授業は行っていない。

今回「万葉旅行」を実施するに当たっても、まとめて万葉集を読むということはしなかった。それぞれが明日香の地に関わりの深い歌を二・三首ずつ担当し、口語訳や解釈だけでなく、その土地柄や関係する人物の紹介などを加えて解説文を書き、「古典旅行学習資料集」を作成することによって、参加生徒の事前学習とした。図書館や教官室にある専門書を利用して調べ、一人一人が自分の読みをまとめた。

取り上げた歌と担当者は、次の通りである。

A 甘樫丘グループ

1557・1558・1559（大仲能史）
2・13・14（藤井淳成）
235・4269・4261（徳永周子）
28・1418・1812（石谷光江）
324・325（児玉順子）

B 藤原宮グループ

52・53（卜部衣世）
51・78（畠山朋美）
356・969・1435（佐藤千文）
1125・1126・4258（藤井佐江）

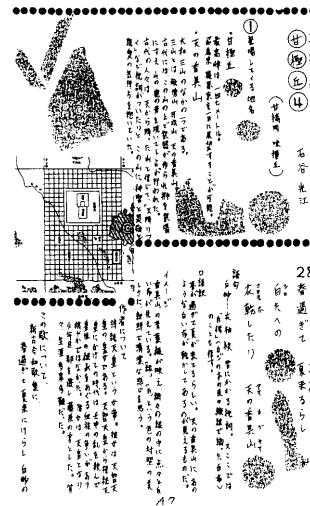
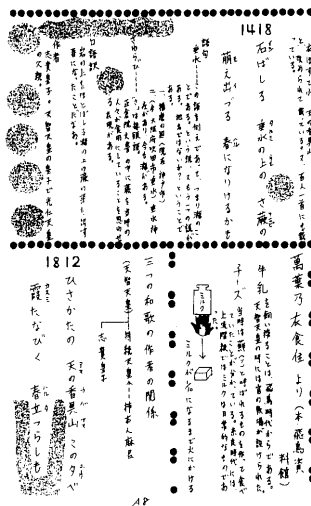
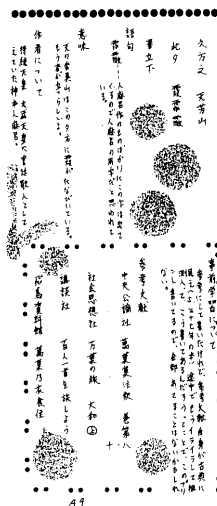
C 磐余池グループ

107・108（岡本光樹）
109・416（藤井明日香）
163・164（卜部修一）
165・166（池室明善）
D 明日香川グループ
1379・1380・2701・2702（藤井 忍）
2713・2859・3544・3545（杉原梨恵）
3266・3267（三好慎子）

E 藤原夫人グループ

103・104（滝本まどか）
1465・4479（松山知代）

F 真神原グループ



61・1636（岡 志津）

3268・3269（勝岡隆史）

G 橋寺・川原寺グループ

3822・3823（西郷甲矢人）

3849・3850（寺地真由）

2. 現地での学習について

◆現地での行程

一日目 甘樫丘・藤原宮跡・伝磐余池・香具山

二日目 飛鳥寺・藤原夫人墓・飛鳥板蓋宮跡
・石舞台・橋寺・川原寺

橿原神宮前駅に着いてすぐに、レンタサイクルで明日香の地をめぐる。上記のポイントでは、関連した歌を担当した生徒が、事前に冊子にして全員に配布しておいた学習資料を使って歌の紹介をする。慣れないハンドマイクを用いてではあったが、どの生徒も自分の担当箇所をしっかりと説明していた。その後教官が解説を加えるという形で学習をした。後は時間が許す限り、散策をした。穏やかな二日間であった。

◆旅行での課題

行きの新幹線の中で、生徒には次の二つの課題でレポートを書くように指示をした。

課題Ⅰ『歌に詠まれた地を訪れて』

課題Ⅱ『私たちの万葉集をつくらう』

その日その日の旅程を思い出しつつ、生徒たちはこの課題に一日目の宿での学習時間と、帰りの新幹線の中で取り組んだ。特に、課題Ⅱでは、五七調の長歌を作ることにチャレンジしてみようと呼びかけた。旅行に行く前の和歌の学習は、前述の通りである。『五七調』も『長歌』もどういうものかキチンとは学習してはいないので、かなり、悪戦苦闘していた。標語やスローガンの影響であろうか、どうしても五七五、で落ち着いてしまって七五調になってしまう。帰りの新幹線の中で、金本教官より、「今の歌の作詞をするように、背伸びして、五音七音をつなげながらつくってごらん」というアドバイスがあった。それを得て、彼らなりの長歌をつくった生徒もいた。また、短歌を数首連ねて詠んだ生徒もいた。

8 生徒の作品から

課題Ⅰ『歌に詠まれた地を訪れて』

① 今まで、「飛鳥」という言葉はよく聞いたことがあった。でも、京都や奈良といったら東大寺・金閣寺・法隆寺・清水寺など観光地のような、店がたくさん出ているような所しか行ったことがなかった。その土地での歌やいわれなどを現地で勉強しながら旅行するのは初めてだった。だからすごくいい経験

だと思う。まず、甘樫丘。登るのに疲れた。耳成山・香具山・畝傍山の三山がきれいにくっきり見えて感激した。古典の中でその三つの山が出てきて、一度は見てみたいな、とずっと思っていたので、その感動はとても大きかった。思っていたより、山は、小さくて低かった。でも、ふと、ここの、自分の立っているこの場所に、歴史上のたくさんの有名無名の人々が立っていたんだな、とか、大化改新（あまりにも有名なこの改新）が、本当にここで起こり、蘇我氏や天智天皇とかも存在したんだな、と思うと、不思議で不思議でたまらなかった。その思いは天香具山でも同じだった。ここが持統天皇の、百人一首にも出てくる有名な歌が詠まれた地だと思うと、すごく興味がわいた。のどかな道を自転車でサイクリングしながら行くというのも、とてもその地にあっているような感じがして楽しかった。こういう旅行は初めての経験なので、新鮮だった。そして、自分の調べた歌が歌われた場所に立ったときは、すごく不思議だった。本だけで調べていたのとはまた違って、実際の場所を見ることは実感がわいた。この景色を見て昔の人は詠んだんだなと思うと、その姿か目に浮かぶようだった。それぞれの歌には歴史の背景があることを聞き、その歌に歴史が見える、というのはとても神秘的な気持ちがずっとしていた。なんか、より歴史にも歌にも興味がわいたように思う。来てよかったなと思った。また、もっと詳しく調べてみたいなと思った。

（杉原梨恵）

② 明日香と聞くとたぶん皆、歴史という類のものを感ずるだろう。私もその一人なのだが、私にとって何よりも自分の名前と同じなのだ。この偶然はいい何なのだ。明日香の地が私を呼んでいる、という軽薄な理由で参加した私。

が、そんな私でも「こういうところで政治が行われていたんだ。」と考えながら、この明日香の地を踏むと、やはり感動が自然とわいてきた。こんな気持ちのいい感動は久しぶりだった。甘樫丘に登ったときに見渡した明日香の地で、千三百年ほど前に、大化改新という、時代を変えてしまう革命が起こったのだ。今、自分が踏んでいる地で。そんな感動を抱えて、いい気持ちで自転車を走らせていたのに……。磐余の池を見るまでは。しかも、自分の調べた所だったので、すごく磐余の池には期待を寄せていたのに。はぁ。落胆してしまいました。私があんなにあんなに期待していたところが……。もっと風情のある風流な池だと思った。けれど、私の期待と

はうらはらに、な—んとあの人工的で憎らしいコンクリートで固めてあった池の縁。その周りには人工的な建物の象徴とでもいう工場が建ち並んでいた。しかも堂々と建っていたのが私の機嫌をますます悪くした。私の感動を返せと言いたくなっただけがっかりしたのだから、みなさんには私がどのくらい落胆したのか分かってもらえると思う。

でも、自分の腫で二上山をはじめ、藤原京・天香久山・耳成山などを確認できたのは本当に自分の財産になったなと思う。

(藤井明日香)

- ③ この古典旅行「万葉集—大和の旅」の予習で、僕は磐余の池の所を調べた。この磐余の池とはあまり関係がないようにも思われたけど、聞くところによると、大津皇子が処刑されたところで、この辺りで僕の調べた大伯皇女の歌ができたのもこの辺りらしかった。僕の調べた二首はものすごく切ない歌だったので、この磐余池という所はさぞ趣があるところなのだろうと、ある種のイメージをふくらませてやって来た。甘樫丘や藤原京を見ると、歴史や古文の教科書でしか触れることのできなかつたものに直接触れられたような気がした。頭の中のイメージがふくらんだ。

そしていよいよ磐余の池に着くと、そこには、コンクリートでできた少し大きなため池があり、僕は少し目を疑ってしまった。僕は林の中の小さな池のような、少し切ない印象を与えるものを想像していたが、目の前に広がる光景は、その切なさを超越していた。

その原型すらとどめていない現代技術の技により作られた池を見て、僕は、町は変わってしまったが、僕らが和歌を解する心は変わらないような気がした。文字は本当に力を持っていて、その力は時を経るごとに増すような気がした。場所の雰囲気はないが、古人の和歌を聞くと、その時の風景や古人の気持ちがよく理解できるからだ。やはり愛する家族を失う悲しみや誰も愛することができない青春時代を過ごす悲しみは、いかなる時代でも変わらないのだと思った。いろんな時代にいろんな風習があったが、人の心は変わるものではないということを確認できた気がした。当時の美しかったと思われる磐余の池も形を変えても今に至っている。その事実が僕らの存在証明であるような気がした。

(卜部修一)

- ④ 私は、藤原宮跡を調べて発表した。よって、藤原宮跡について述べる。

自転車であれよあれよとついていくと、何もないただの殺風景な場所に着いた。そこが、藤原宮だと聞いて驚いた。もう少し、復元された宮殿とかがあるのかと思ったら、きれいに区切られ小石が敷き詰められた、広々としたところだった。その向こうはただ畑が、これもまたきれいに区切られていた。茶色、緑色、灰色が絶妙に組み合わせられていて、とても美しかった。また、高層ビルもなく、ほんとうに、写真に何枚も撮りたくなるようなのどかな景色だった。この地に千三百年くらい前に造られた、藤原宮の区切られた跡が残っているだけでも、よく考えたらすごいことだと思った。だって、室町時代にも江戸時代にも、この場所に人の手が加えられて消える、ということがなかったからだ。そして、長歌や短歌が創られ、今も残っていることに感動を受けた。やはり来てみなくては感じられないものだと思った。

ここでは、ここで暮らしている人が、様々な自分なりの遊び、趣味をしていた。ゴルフ、散歩、写真を撮ったり、と。まわりにせせこましく建てられた建物がなく、また、ねこの糞も犬の糞もなかった。私はすごいことだと思う。このようなのどかな土地を残せる人々は、環境を大事にし、道徳をちゃんと持っているのだな、と思った。

途中、甘樫丘を登り昼食をとっていたら、定年になってこの地にやって来たという年輩のおじさんが私たちに、「あれは〇〇、これは……」と、教えてくださいました。その時、「ここは住みやすいよ。」とおっしゃった。私は、そうかもしれない、このままであってほしい、と思った。

(卜部衣世)

- ⑤ 3月23日。今日は空が晴れ渡っており、甘樫丘からは周りの景色がよく見える。今回私が調べた歌の舞台となった雷丘は、ここから北の方角にある。意外に小さくて、拍子抜けしたが、きっと雷丘から見る風景もこれくらいよく辺りが見渡せるのだろう。この甘樫丘から見る飛鳥浄御原宮跡。それは一見しただけではどこのことだろう、と思うくらい、今では当時の名残みないなものも感じられなかった。先生の説明を聞いて、初めて、えっあそこが、と思ったくらいだ。だから、この歌の作者、山部宿禰赤人は、どんどん廃れていく浄御原を見るとどうしてもその都の全盛期を思い浮かべてしまうことだと思う。しかし、それでも歌の中では『止まず通はむ』とあるくらいだから、よほど旧都への思い入れは深いと見える。あまり藤原宮とは離れていないから通えるだけかもしれないが、それはたいして関係はないだ

ろう。

さて、この歌の後半部は、浄御原の風景についての描写だ。この山や川の偉大さを書いているが、実際その通りだった。のどかな田園のまわりにそびえる山々や、飛鳥川を見ると、昔の人じゃなくても、何か歌とか詩を創りたくなるのではないのだろうか。蛙が鳴いているのこそ聞けはしなかったが、展望台から、朝日が昇り、夕日が沈むのとかはさぞかし見応えのあることだろう。次に来るときは、飛鳥川のそばに霧が立っている風景を見たい。きっと幻想的な雰囲気私たちが迎えてくれることだろう。

(児玉順子)

- ⑥ 狭いぞ!! というのが初めの印象でした。政治をしているところと言われていくらいなので、大和三山が互いにうっすらと見えるくらいの広さかと思っていました。

今日実際に行ってみて、金本先生の話聞いて考えたのは、価値観の違いでした。今や世界中の人々と瞬時にコミュニケーションできる、こんな時代に慣れている私だから狭いと思ったのか。天香具山の近くにあったという京と、藤原京は、自転車で行ける距離で、私にはそう離れていないと思いました。が、昔なら、徒歩。まあ位の高い人なら乗り物に乗ったかなという手段で、しかも行動範囲が今で考えると狭いことから、飛鳥という地は、昔の人にとって、本当に広いものだったのだと分かりました。昔のことを学習しておかないと、こんなことさえも理解できないものか、と事前学習や古典の学習がいかに大切なのかということを知りました。

持統天皇という女性が、「春過ぎて～天香具山」というとっても有名な歌を詠んでいます。その歌から受けた彼女のイメージを色で表すと、white でした。が、磐余の池のところで処刑された彼は彼女の陰謀のせいだということを知り、彼女のイメージを同じく色で表すと、blackになりました。

それにしても、天香具山という山は、昔の人が天から降ってきた山と考えたのも無理ないかもしれないと思いました。今ですら登りやすいようにしてあるつもりだろうが、とても急で、頂上までたどり着くのに苦労したので、昔ならなおのことだったろうと思われる。昔の人がなんだか近づきにくい山だったと考えてた気持ちが私にも理解できた。私が「春過ぎて～天香具山」という歌に出会って何年もたっていると思うが、ずっと女性的な山で優しそうというイメージを抱いていたので、実際とのギャップが激しかったです。(石谷光江)

- ⑦ まず、私たちが訪れたのは甘樫丘だった。そこからは大和三山のすべてが一望できた。私は中学二年のときの選択教科の古典で、万葉集を少し学んだときに、その三つの山の写真は見たことがあったので、天香具山が山と言われているが私の予想よりもはるかに低く、なだらかな丘のような山であること、畝傍山が他の山より少しいかついことなどを知っていた。が、天香具山・耳成山・畝傍山の間の空間は何か凝縮されたような感じを受けた。きっとそれは昔、国の中心として営まれていたという圧迫から来るものなのだろうと思った。

今もこの土地はとても静まりかえっているけど、遷都された後の古都というのは今感じるものとは違う静けさがあるのだろうかと思う。今まで栄え、人も多かった場所に痛ほどの静寂があって、そんな現実の向こうに作者は昔のにぎわいを感じていた。そしてこれは遷都があるたびに人々が感じてきたことではないのだろうか。政治の中心に中心にと行こうとしてこぼれてしまった人や、その渦の中に生きていても中心には入ることができなかった人々は、自分たちと大いに関係のあることが自分たちとは無関係の場所でそうになっていくことを、ありのままに受け止めているように思うけど、やっぱりその場所を好きになって、その土地との別れを惜しむことは当然なのだ。

めまぐるしい動きとその間にある思いが混ざり合っていたことを想像させるような土地だった。

(藤井佐江)

- ⑧ 「大口の真神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに」という歌は、雪だからきっと冬に詠んだのだろう。ここに雪が降って真っ白な世界になったらすごくきれいだろうな。周りは田んぼで建物ほとんどないし、想像するとうっとりする。「立ち寄り家も無いのに」は今の景色からも簡単に想像できた。本当に何もなかった!! 宮殿跡にはお風呂みたいのがあったが、……。あれは本当に何なのだろう。井戸? お風呂? いろり?? いろいろ想像がふくらんでいく。(誰かが昔のお風呂はサウナみたいだ、と教えてくれた。)

それにしても何もなかった。「何も無いところに実は有名なものがたくさん」という感じだった。香具山や畝傍山は、その何もないところにぽつんとあり、スケールは小さいが、なかなか味わい深かった。まるで海に浮かぶ小さな島みたいだった。田んぼか海で、山や丘が島。なんていい味出しているのだ。たまには田舎もいいものだ。しかも、ここはただの

田舎ではなく、歴史がある。今の日本の原点がここにある、と言ってもいいくらいの古い歴史が。でも、狭い世界で生きていたのだなあ、と思う。現代もあと千年たったら、「君達、狭い中で生きていたのだねえ」と言われるのかなあ。だんだん世界は広くなっていく。広くなっていく、と言うより世界を知っていくと言う方が正しいかもしれない。とにかく歴史とロマンの地、明日香村。ここに来てよかった。

(岡 志津)

- ⑨ 私は明日香川にまつわる歌を調べていたのだが、本物の明日香川を見たときに、ありゃ小さい川だなあと思った。

いろいろな人が明日香川について歌を詠んでいるので、どんなにすてきな川だろうと思ったが、(まあすてきでないわけではなかったが、)なんか、ふつうの川だったので、少し拍子抜けしたのだ。あまり歌について詳しく調べてなかったのが、勝手な妄想で突っ走っていた私が悪いような気もするが、よく考えると、明日香川はきっと当時の人々の生活に密着していたのではないだろうか、という結論に達した。また、今の明日香川は趣がものすごくあるというわけではなかった。それも、今の時代にとけ込んでいて、親しまれている川だから、特別な感じを漂わせているのではないだろうと思った。明日香川は、人がどう思おうと、今も昔も変わらず流れ続けているだけなのだから、当たり前といえば当たり前なのだが……。この古典旅行では、昔の人もこれを見ていたんだ、この土地を歩いていたんだ、ここにお屋敷があったんだ、と想像し感動することが多かった。なんか歴史の時間の話というのはこういう現実味がないというか、作り物のお話とそう変わらない感覚だったんだけど、少しそれが本当のことって感じで、私たちも今、そんな歴史の一部を創っているんだと思ってしまったのだ。

というわけで、本当によい経験をしたと思う。昔の人の感じていたことなどを、同じように感じてみようとするのはおもしろいことが分かった。とにかく、私の中で新しい価値観が生まれたらしい。本当によかったと思う。

(藤井 忍)

- ⑩ 私は今回の旅行で、いろいろな明日香を想像した。芦田川くらいはありそうな明日香川。盆地の中にそびえ立つ大和三山。澄み切った磐余の池。しかし、甘樫丘から見る奈良は、小さかった。大和三山は、小さいものだった。明日香川は細い、支流みたいな

ものだった。大化改新が起こったのは甘樫丘から見ると、山間の土地で、戦争が起こったとは全く思えない土地だった。天香具山は近くから見ると意外に大きくて、登るのに疲れてしまったが、山頂は狭い。磐余池は、まわりになくさんの工場ができて、雰囲気も何もなかった。しかし、今日行ったところはすべて、遺跡が残っていたからであろうか、感動していた。何故だろう。私はちょっと考えてみた。すると、昨日行った所は建物がなく、今日行ったところは建物があった。昨日行ったところは森の中だ。汚いな、と思った。今日行ったところは建物が残っていてなんてすばらしいのでしょうか、と思った。これらのことを比べてみると、私は明日香の地で、想像力を使っていないのであった。一日目の行程は千年以上の昔のことを想像してみようというものだった。二日目はものを見て感性を高めようというものだった。今思えば、一日目はおもしろいのである。昔から汚い明日香川を歌にしたり、大和三山の中で一番低い天香具山を一番ひいきにしてみたり、大和人の心は想像力があるのである。というより、とんちを持つ余裕があるのである。実際私が和歌を作っても、どうしようもない作品になってしまう。この旅行は想像力に頼ってみようという、なかなかためになる旅行だった。

(松山知代)

- ⑪ たちばなの長屋は無かった。もう、飛鳥時代の名残は殆ど無いようである。しかし、とても魅力的なものに出会った。飛鳥時代の「二面岩」である。

世の中には「性善説」と「性悪説」とがある。僕はいずれの立場をもとらない。また、人間の中に「善の部分」「悪の部分」がある、とも思わない。人間は関係的存在である。構造が人間を造る。僕には、あの二つの顔が、全く同一の人物の、その条件における真実の姿であると信ずる。いや、そうでなくては何故一つの岩に刻みつけなければならなかったのか。

ヒトラー・ナチスドイツ下におけるホロコースト、日本軍部の下における中国侵略、これらを見てもそうである。善良なる人々が、悪魔の行為を行う。きっと飛鳥の人々もそれを感じていたに違いない。有間、大津の両皇子の悲運、これのみを見てもよく分かるのである。

しかしながら、人間を変化させる構造をつくりあげるのは人間なのである。人間は、その同一なる人物の、まるで異なった形相に正対せねばならぬ。そして、人々が皆その善の微笑を浮かべられるように

……と、彫刻家は祈ったのではなかったか。

僕は、その石の前で、二度写真を撮っていただいた。

(西郷甲矢人)

- ⑫ 川原寺跡へ行って感じたことは、思っていたよりけっこう広いということだ。もっとこぢんまりとしたお寺だったのかなと思っていたけど、実際にその跡を見てみると、なかなか立派なお寺だったのではと思った。私が調べた歌は生と死とか、悟りとかで、難しかったけれど、ちょうど倫理でそのあたりをやっていたので、それを思い出しながら少し考えてみた。今に比べれば、もっと山とか自然が川原寺のまわりにはたくさんあったろう。自然は変わらないのに自分たち人間はいつかは死んでしまって、そのことで苦しむ……。私なりの解釈だから全然違うかもしれないけど、川原寺はそういうことを考えさせる場所だったのではないかな、と思った。とにかく広々とした、お弁当をおいしく食べられるいい場所だと思った。

今回、古典旅行に参加して私一人だったらとても行けていない場所へ訪れて、みんなの説明や金本先生の説明を聞いて、少しは和歌への接し方や実際にその場所へ訪れてみるおもしろさなどが分かった気がする。天気も良かったし、充実した二日間だったと思った。

(寺地真由)

課題Ⅱ『私たちの万葉集をつくろう』

- ① 初めての 飛鳥の地を踏む
その人は そこにいまする
神々の あらゆる風を
司る 一人の神に
気に入られ 霧なく晴れた
その景色 歓迎の意を 送りいただく
(藤井 佐江)
- ② 山道を 登り登った
香具山で 今の大和を
見渡せば 煙立たない
国原と 姿も見えぬ
ユリカモメ 時は流れて
世は変わり 人は無けれど
その心 変わらぬ歌に 今を生き抜く
(藤井 淳成)
- ③ 現代の 磐余の池を
前にして 打ちひしがれし
我が心 古からの

歌を詠み 時の経過を 嘆きつるかな

反歌

町変わり 時代も移る
だがしかし 人の心は かわらざりけり

旅行にて 友と過ごした
二日間 後に残るは
満足と 千年分の 疲れだったよ

(卜部 修一)

- ④ 初めての 万葉の地に
興奮し 光樹追いかけて
甘櫂の 桜の枝に
頭打つ 血出でにけり 春の陽気に
※光樹=作者の友人の名

(池室 明善)

- ⑤ 長歌

久方の 光のどけき
春の日に われらがママチャリ
列をなす 甘櫂の丘
会長は 桜にジャンプ
傷つくり 額に血出る
藤原京 走ってでかし
香具山は 土はぬかるみ
革靴は 大いによごる
磐余池 少し残念
池岸は 人工的だ
旅の夜は 寝るのはタブー
夜更かしで 朝ぶち眠い
飛鳥寺 大仏がある
夫人墓 山が墓なり
草・岩の 板蓋宮
石舞台 地下に穴あり
橘は 天井きれい
川原で 弁当食べる
歴史・土地 思いをはせる 古典旅行

反歌

昼古典 夕は討論
夜遊びも 貴重な発見 古典旅行
※会長=学友会会長・作者の友人

(岡本 光樹)

- ⑥ 香具山の名前にひかれ
明日香の地風はさわやか気分爽快
(訳) 香具山という名前は昔から知っていたが、
行ったことはなく何となく心が引かれていた。

そこで今日明日香の地に立ち、香具山を見た。
なんと風はさわやかで気分爽快なのだろう。
桜咲く季節に訪れ
明日香川ほのぼのとした田舎の景色
(訳) 桜が咲く頃に訪れた明日香川周辺の景色は、
ほのぼのとして田舎の景色そのものだった。
(岡 志津)

- ⑦ 昔から 人に詠まれて
大和の地 ここに見えるは
耳成に 天香具山
畝傍山・大和三山 仰ぐよ空を

いにしへの 都は狭し
飛鳥の地 今の世界は 宇宙的規模

香具山に 衣たなびく
大和の地 あればまぼろし 昔の歌よ
(滝本 まどか)

- ⑧ 自転車で 晴天のした
春風を 切りつつ走る 奈良明日香の地

甘櫿丘 かたいつぼみを
横にして 思う飛鳥は 古の都

趣を 磐余の池に
求めても 古人の涙 コンクリの岸
(藤井 忍)

- ⑨ 藤原宮跡で、私は小石の上に腰を下ろした。その小石は、一つ一つに暖かみを感じるのではなく、私が座った所のその石々が固まりとしてとても柔らかなぬくもりを感じさせた。分かっていただけのだろうか。そして、穏やかな日差しが私を柔らかく包んでくれるので、私は「あ〜、春が来たな〜。」とその時この地で 春が来たのを実感した。(それまでは、とても風が冷たかった。もう少しだと、春の到来を思っただけだったが、心身では感じなかった。) として詠んだこの歌、

春や来む 藤原宮の
跡地にて 小石の上に 足をくみけり
気持ちが十分表れていないので、もうひとつ
春や来む 藤原宮で
足をくみ 小石のぬくもり 体にかみしめ
また、もうひとつ
春や来む 藤原宮の
跡地にて 石のぬくもり 足くみかみしめ

また、長歌では、
春や来む 藤原の宮
跡地にて 足くみ腰掛け
心から 小石のぬくもり 時忘れさす
いかがなものでしょうか。ご意見・ご感想お聞かせくださいませ。

(卜部 衣世)

- ⑩ 私は、藤原宮跡を訪れたとき、小高い丘の上にある大きな木の株を見て、昔の藤原宮の庭園を想像した。そのことについて詠んでみようと思う。

藤原の 小さな丘の
切り株よ おまえは昔も そこにいたのか

(畠山 朋美)

- ⑪ 飛鳥川 歴史にひかれ
来てみれば ごみの多さに 芦田川を思う

(勝岡 隆史)

- ⑫ 春の風 あびながらゆく
歴史の地 意外に近く 驚くばかり

見渡せば 辺り一面
石詰めの 昔は都
きらびやかに 私の心で 光り輝く

明日香川 あらしに水を くるわせて
今は静かに 流れさびしき

磐余の池 死を決められた
悲しさに 自分もひたり しみじみ思う

藤原京 神木を見て
神々の 神秘の力 考えてみる

甘櫿の 丘に登れば
三山は 堂々とある
よかったな 天気が良くて 姿見られて
(杉原 梨恵)

- ⑬ 神すらも おそれおののく
明日香の地 青き空にて 我ら迎える

広くあり 三つの山に
支えられ 力強きぞ 藤原京

神降りる 雷の丘
従えて この地見守る 甘櫿丘

(佐藤 千文)

- ⑭ 甘樫丘にてお弁当を食べながら
甘樫の 丘で食べるは
福山の 地にて作りし 母のまごころ

藤原の宮跡と呼ばれる野原を眺めながら
藤原の 宮にて座り
思い描く 古き時代は いかなるものかと

二上山を眺めながら
古への 歌をききつつ
見し山の 思いはいつぞ 消えゆくものか

旅館で一息つきつつ
泊まる宿 駅前旅館
聞こゆるは 鳥の音でなく 町さわぐ声
(児玉 順子)

- ⑮ 明日香村で詠んだくだらぬ歌についての自評と、
明日香村の感想

君がため 明日香の野に出て
むらさきの すみれ摘めども
花はすでに 宿にてしおれぬ
芳香も 今や薄れぬ
采女らの 袖吹き返す
明日香風も 君には届かぬ
やまとうたも われはよくせず
何をもって 君に送らん
この情 余りあまりて
言葉足らず 君をなつかしみ 一夜寝にける
反歌
赤人の 額田王の
吸いし息を 今日吾吸ふ、この明日香風

長歌は、勿論おわかりのように、パロディに満ちあふれている。何故であろう。明日香の地を訪れながら、その思い出や印象はみな、万葉集の和歌それ自身についてのもので、あまり風景や土産品に関するものがないのだ。その一つの理由としては、明日香の風景のあまりの平凡さ、「趣き」のなさが挙げられるかもしれない。ただの田である、ただのドブ川である。藻は玉などと呼べるものではない。しかし、その外見を超越して、赤人や額田、人麻呂そして何より作者不詳の歌は、千数百年前の“明日香”を感じさせてくれた。悲しいことであるが、我々とこの自然をの愛をつなぐ、ほぼ唯一の絆は、古典和歌のような、古代の人々と息吹を感じさせる芸術しか残されていないのではないかと、思われる。

一方で、この旅で僕はこの日本という風土への、本当の意味での誇りを感じた。赤人が、額田王が、確かにここに生きていた。そして、今僕は同じ明日香風を吸い、彼らと同じ悩みを抱えて生きていこうとしている。進行形の実際の心情とは異なり、「我吸ふ」と現在形で書かれた反歌には、僕がこの旅で感じた、「日本文化の上にある自分」への誇りがこめられていると思う。
(西郷 甲矢人)

9 まとめ

この旅行で明日香の地を巡り、課題に取り組むことで生徒たちは何を得たのだろうか。わざわざ訪れても、そこは何の変哲もない日本の田舎といえば、そうである。この備後や備前の郊外にも似ている。しかし、やはり帰りの新幹線の中の雰囲気は、「来てよかった」なのである。

生徒たちは、事前に学習したことや担当者の説明・教官の解説と、眼前の明日香の景色との間に『想像力』という橋を架けて、歌詠み人の置かれた状況やその心を味わっている。また、事前学習で学んだことだけでなく、他の教科などから得た知識も使って、万葉集と取り組み万葉の人々の心をつかもうとしている。広島にいて、作品を読んだだけ、いろいろな資料を参考にしながら作品や作者について調べただけではつかめなかったろう。また、明日香の地に行っただけでは分からなかったろう。両方の活動や課題があってこそ、彼らの中に、「確かに万葉の人々がここに生きていた、自分たちと同じように生きていた」という実感が生まれたのである。その実感をもとに再び万葉の歌を読んでみると、千年たっても変わらないものや変わってしまったものが、改めて見えてきた。そして、現代に生きる自分をも見つめることができたのである。

このように様々な知識や活動が生徒の中で作用しあい、生徒それぞれの「読み」を生まれさせた。課題Ⅰや課題Ⅱの作文を読むと、この行事を通してそのような作品との接し方ができたと分かる。今回の古典旅行の課題に応える形で書かれたこれらの作文は、学習の結果であり、体験したことを形に表したものである。そして、それは学習の結果であるだけでなく、彼らと万葉集のつきあいの始まり、古典作品を楽しむことの始まりでもある。